

小動物緩和ケアにおけるオゾン療法の可能性 Potential for ozone therapy in palliative care of small animals

川部美史、村上麻美、柴田早苗

Mifumi KAWABE, Mami MURAKAMI, Sanae SHIBATA

岐阜大学応用生物科学部

Faculty of Applied Biological Sciences, Gifu University

はじめに

オゾンは分子式 O_3 で示される、酸素の同位体である。オゾンが医療分野において最初に用いられたのは 1890 年代のドイツであり、1950 年代にオゾン発生器が開発されて以降、オゾン療法はヨーロッパを中心として広く普及している。日本においても医療および獣医療現場に導入され、臨床現場においてその効果が認められつつあるが、安全性が高く安価な治療法であるにもかかわらず利用できる施設はごく限られている。

小動物臨床において、家族であるオーナーはペットの病気や死別に関わる様々な苦痛を経験する。近年、人医療で緩和ケアの需要が急速に高まっており、同様に獣医療においても緩和ケアを望む声は多い。現在我々は小動物緩和ケアに積極的に取り組んでおり、その現場にオゾン療法を導入している。我々が経験した主な症例について報告する。

症例 1

ドーベルマン 去勢雄 7 歳 4 か月 45.3kg

血管肉腫のため脾臓摘出後、化学療法を実施した。化学療法（ドキソルビシン、ダカルバジン）にオゾンガス腹腔内投与を併用したところ、副作用の発現は比較的軽度にとどまりプロトコルを完遂することができた。術後 2 年生存し、別の疾患により死亡した。

症例 2

雑種猫 避妊雌 10 歳 7 か月 4.8kg

脈管浸潤のある乳腺瘤のため乳腺全摘出を実施した。化学療法を希望されなかったため、定期的にオゾンガス直腸注入を実施した。2 回の局所再発はその都度切除し、術後 2 年経過したが現在も生存中。

症例 3

雑種猫 雌 3 歳 10 か月 2.0kg

腰部の線維肉腫のため断脚した後、局所再発と遠隔転移が認められた。患部が自壊しており悪臭も激しかったが、オーナーは安楽死をせずに最期まで看取ることを希望した。患部の洗浄にオゾン水を使用し、オゾン直腸注入を併用した。2 週間後に死亡したが、生存中の悪臭軽減と一般状態の改善が得られた。

考察

症例 1、2 では一般的に長期生存が期待できない腫瘍において、良好な予後を得ることができた。非常に状態が悪かった症例 3 でも一般状態の改善が認められるなど臨床症状の緩和において有効であった。症例はすべてオゾン療法に伴う異常所見を認めなかった。腫瘍に対する直接効果に関してはさらなる詳細な検討が必要であるが、オゾン療法を経験したほとんどのオーナーの満足度は高く、今後の活用が期待される。